The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『ニャイ・ダシマ物語』の世界
Author(s)	平本, えり子
Citation	大阪大学言語文化学. 1993, 2, p. 97-106
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/78180
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『ニャイ・ダシマ物語』の世界*

平本えり子**

Tjerita Njai Dasima was published in Batavia (now Jakarta) in 1896. This novel was one of the earliest works written in the Melayu language and it is well known even today. The purpose of this thesis is to examine the great popularity of this novel and what it tells about social life in those days.

Early works of literature including *Tjerita Njai Dasima* have attracted very little attention in the history of Indonesian literature. But these novels have great significance. They are the only records of the Netherland Indies during a period when natives themselves left few reliable records of their own. In addition, these novels were written for pleasure, and readers' consciousness is reflected in them. The analysis of these novels will enable us to look at people's consciousness, their life and social conditions at that time.

1 はじめに

1896年バタヴィア[1]で出版された『ニャイ・ダシマ物語』(*Tjerita Njai Dasima*)[2]は、当時多大の人気を博したムラユ(Melayu)語[3]オリジナル小説である。ここで

*The World of *Tjerita Njai Dasima* (Eriko HIRAMOTO)

**言語文化研究科博士後期課程

[1]現ジャカルタ、インドネシア共和国の首都。

[2]Francis. G, *Tjerita Njai Dasima*, Kho Tjeng Bie, Batavia, 1896. またこの作品を含め、同時代のムラユ語オリジナル小説8編が次のアンソロジーに原スタイルのまま再録されている。Pramoedya Ananta Toer(ed.), *Tompo Doeloe*, Hasta Mitra,Jakarta,1982. なおここで使用したのは、インドネシアの国立図書館所蔵のオリジナルテキストを複写したものである。

[3]マライ語、マレー語とも呼ばれる。当時オランダ領東インド（現インドネシア）都市部で日常的に使用されており、現代インドネシア語の母体となる。ここでは、マレーないしマラ

はこの作品を手がかりに、この作品が出版された当時のバタヴィア社会についての考察を試みる。

この当時、ムラユ語オリジナル小説は娯楽作品として、また商業出版物として市場メカニズムの下で出版されていた。そのため題材の選択や話題の展開など、物語世界に読者の好みを反映させることが不可欠であった。また『ニャイ・ダシマ物語』はその中でも特に人気が高く、何度も版を重ねており、また当時の演劇の題材としても取り上げられている。これらのことから『ニャイ・ダシマ物語』は、人々の意識を強く反映しており、当時の人々の意識を探求する際の資料となりえると考える。

2 小説『ニャイ・ダシマ物語』

この作品は、イギリス人Wのニャイ（現地妻）であるプリブミ（原地住民）女性のダシマが、財産を狙うプリブミ男性サミウンに騙され、財産を奪われたあげくに殺される、という物語である。登場人物はW一人を除いてすべてプリブミであり、舞台もプリブミ世界に置かれており、プリブミ世界を描くことが物語の中心になっている。

その中でも特に目を引くのは、そこかしこに現れるイスラムのモチーフである。何らかの形でイスラムが出現する箇所は38ページ中21箇所もある（表1・イスラム場面一覧表参照）。単純計算して2ページに1回、つまり見開き1ページ毎に1回出現する割合である。本の大きさがほぼ新書大(17 × 9.5cm)であることを考えると、ページをめくる度に顔を出すイスラムは、この物語の中に一貫して流れる重要なモチーフであり、物語の主題とも深く関わるものだと思われる。そこでまず、『ニャイ・ダシマ物語』の中でも特にこのイスラムに焦点をあて考察を始めることにする。

イという表現が暗示する地域的・種族的意味合いを避けるため、ムラユ語という表記を使用した。また地域名称に関しては、年代的に植民地期であること、扱うテキストの視点も植民者側からのものであることなどをふまえ、歴史的呼称を採用した。

3 物語の中のイスラム

3.1 イスラムと場面展開

まず、イスラムがどのような場面で出てくるかを見ていく。

イスラムのモチーフは物語の発端から顔を出す。悪巧みを企んだサミウンが老婆ブユンを仲間として誘い込む場面である（資料２、場面１。以下場面番号のみ記す)。良いことでないと手助けはできないというブユンにサミウンは断言する「婆さんは私にだけでなく、予言者ムハンマド(Nabi Moehammad)[4]へも善行をなすことになる」[5]。それを聞いたブユンは「予言者ムハンマドへの善行なら、喜んで手助けしよう」[6]と即答し、あっけなくサミウンの手下となってしまう。

同様のパターンは、ブユンとWの屋敷のプリブミの召使との間でも繰り返される。Wはダシマがプリブミと親しくすることを好まなかった。そのため、プリブミのイスラム教師を屋敷へ招くためには、あらかじめ召使を口止めしておく必要があった。その時ブユンが持ち出した理由もイスラムである（場面７)。「我々イスラム教徒は、イスラムの教えを学ばなければならないか、そうではないか」[7]とのブユンの言葉に、召使たちは声をそろえて「我々イスラム教徒は、イスラムの教えを学ばなければならない」[8]と答える。ブユンは「イスラムを学びたいニャイのため … お前たちはこのことを決して旦那に知らせてはならない[9]」と続ける。召使が了承の声を上げた後、ブユンは彼らをじっと見つめ、その後おもむろにイスラムの祈りの要領で両手を挙げ“Alhamdoelillah”[10]と唱える。

プリブミが何かの行動を取る場面でイスラムが強い関わりを持っているという点では、ダシマに関しても例外ではない。自らをイスラム教徒であると再認識し

[4] イスラム教で唯一神アラーの言葉を伝えた予言者。ムハンマド（570年頃－632）は予言者であるが人間であり、唯一神アラーだけを信仰の対象とするイスラム教徒が善行をささげる対象ではない。この台詞はイスラム教義に照らせば間違いである。なお、Moehammadは原文から旧綴りのまま引用。以下、原文からのムラユ語の引用はすべて旧綴りのままで行う。

[5] Francis.G., op.cit., p.5. 翻訳の際、句読点の一部を改め、コンマを「,」でなく「。」で表記した。日本語としての意味の整合性を持たせるためである。以下、同様とする。

[6] ibid., p.5.

[7] ibid., p.14.

[8] ibid., p.14.

[9] ibid., p.14.

[10] アラビア語、神への感謝の言葉。ここでも唯一神アラーと予言者ムハンマドの混同が見られる。

たダシマの耳許で、ブユンは囁く。「ニャイはイスラムを信仰する者。その義務は信心深くあること」[11](場面6)。「ニャイと旦那の生活は姦通。結婚していない生活がどうあるべきかはすでに予言者ムハンマドが命じている。ニャイはすぐに信仰に従わねばならない」[12](場面11)。そしてブユンは、ダシマの正式な結婚相手としてサミウンを強く勧める。

ついにWとの別離を決心したダシマは彼に告げる。「怒らないでほしい、私はイスラム信仰を実行する者になりたい。私はイスラムを信仰する者。なのに長くあなたに従ってきた、結婚もせず、姦通のままで。… 私はあなたと別れたい」[13](場面14)。全く予期していなかったダシマの言葉に、Wはしばらくの間言葉を失う。気を取り直したWはダシマを引きとめ、「お前をキリスト教徒とし、結婚してもいい」[14]と告げる。しかしダシマは怒り、「私は異教徒になりたくはない。私は私の信仰を持って生きたい」[15](場面15)と言い放つ。

このようにイスラムは、プリブミが何かの行動を起こす場面で、その動機付けや指針となるものとして描かれている。つまり、イスラムはプリブミの行動原理であるとみなされているのである。

3.2 イスラムとプリブミ世界

次に、そのイスラムが作品の中でどのような描かれ方をしているかを見ていく。

最初に取り上げたいのは、ダシマの殺害を思案するサミウンが、殺人というイスラムの大罪に対し、その罪を免れるための贖罪の方法を捜し求める場面である(場面17)。「ハジ(hadji)[16]・サリフンは、サミウンに助言を与えた。… メッカに巡礼してハジとなれ。そこのアル・ハラーム寺院で罪の許しを請い、そして重い罪の許しを得るため多額の献金をするがいい」[17]。翌日サミウンはまた別の者を訪ね、同じ助言を受けた後ダシマ殺害を決心する。

まず、ここに書かれているイスラムの教義はでたらめである。殺人はイスラム法

---

[11] ibid., p.13.
[12] ibid., p.18.
[13] ibid., p.23.
[14] ibid., p.23.
[15] ibid., p.24.
[16] イスラム教徒の5つの義務のひとつであるメッカ巡礼(アラビア語ではhaj)を行った者、及び彼らに与えられる称号。ハジの称号は地域社会で強い威信を有している。
[17] ibid., p.31.

においても大罪であり、いくらハジになろうとも、いくらお金を積もうとも許されるものではない。また、翌日サミウンが訪ねたのはインド人街のグル(goeroe)[18]であり、イスラムとは無関係である。そもそもハジ・サリフン自身が、サミウンがダシマに呪術をかけるために呼び寄せたドゥクン(doekoen)[19]であり（場面３）、ここにはイスラムとヒンドゥー、そしてジャワの土着信仰との混同が見られる。

それでは、そのハジ＝ドゥクン＝グルの取るイスラムの行為はどのように描かれているだろうか。まずハジ・サリフンであるが、彼は「魔法と惚れ薬で有名なドゥクンだった」[20]とされている（場面３）。サミウンは、彼にダシマの髪の毛を渡し助力を乞う。ハジ・サリフンはダシマに呪術をかけ、その後ブユンに魔法の秘薬を手渡す。それはダシマがWを嫌い、逆にWは何でもダシマの命に従うようになるというものであった（場面10）。

ここで描かれているのは、まじない、惚れ薬などの秘薬、髪の毛と呪術、怪しげな呪術師など、薄暗い人知の及ばぬ世界である。そしてこの世界がイスラムの名のもとに語られている。人々はことあるごとにイスラムを持ち出すが、信仰の実態は迷信であり呪いである。ハジが大きな役割を果たすが、彼は呪術師として登場し、したり顔ででたらめなイスラムの教義を説く。このように、イスラムはプリブミ世界の迷信の代名詞であり、同時にプリブミの不可解さの源泉ともされていたのである。

4 『ニャイ・ダシマ物語』の世界

4.1 作者と読者

この作品の作者フランシス(Francis, G., 1860-1915)は、イギリス系ヨーロッパ人のジャーナリストであったといわれている。このフランシスに限らず、初期（1920年代頃まで）ムラユ語小説は、作者はおおむねユーラシアン（欧亜混血児）やプラナカン（華人）などの非プリブミ層であった。ムラユ語を使用しているとはいえ、出版物で使用されているローマ字を読みこなすための西洋式教育の普及

[18] もともとヒンドゥー教の「導師・教父」の意味。一般的に教師・先生としても用いられるが宗教的にはイスラムとは無関係。
[19] ジャワの呪術師。土着信仰に基づく呪いや医療行為を行う者から、イスラム神秘主義に基づく行者まで多岐にわたる概念を含むが、ハジとは別のものである。ここでのハジ・サフリンの行為はむしろ伝統的な呪術であり、イスラムとは無関係である。
[20] ibid., p.9.

はプリブミたちにはまだ及んでいなかった[21]。

そのため読者として想定できるのも、やはりユーラシアン、プラナカン、そしてローマ字の識字能力を身につける機会に恵まれた上層部プリブミである。彼らは共にヨーロッパ人社会の側の人間であり、プリブミ女性をニャイとしたり、屋敷をかまえてプリブミの使用人を雇ったりする存在である。いわば『ニャイ・ダシマ物語』におけるWである。そして彼らが共有していたイスラム観＝プリブミ観が『ニャイ・ダシマ物語』の世界だったのである。

4.2 恐怖感と好奇心

植民都市のバタヴィアでは、ヨーロッパ人の生活は常にプリブミと共にあった。何よりも召使などの屋敷の使用人として、プリブミは日常生活に不可欠な存在であった。それどころか、家政をつかさどるプリブミ女性のニャイは、実質的な妻であり家族であった。プリブミ居住区とヨーロッパ人居住区も接近しており、両者は徒歩で十分に行き来ができる距離にあった[22]。

しかしヨーロッパ人にとって、プリブミは常に不気味で不可解な存在だった。ムラユ語からそのまま英語に取り入れられた“amok”に見られるように、ある日突然狂乱に陥るプリブミは時にはヨーロッパ人の恐怖の対象でもあった。そして屋敷の使用人であるからといって、ニャイとして共に暮らしているからといって、彼らが不可解な存在であることに変わりはない。

このような恐怖感、不気味さ、不可解さなどは、恐いもの見たさの好奇心と背中合わせのものでもある。そしてその好奇心は、しばしばまことしやかに、時にはある種の悪意をも込めて語られる噂話という形をとって現れる。いかにもそれらしく語られる噂話は、出所不明という形をとることでかえってその真実味を増し、人々の好奇心を満たす。表紙に「そう遠くない昔、バタヴィアで本当にあった話」と記され、「人々が語り伝えるところによれば」[23]という出だしで始まる『ニャイ・ダシマ物語』は、ヨーロッパ人の間に共有された、プリブミ世界への噂話とも言える。

---

[21] ムラユ語はもとはアラビア文字で表記されていた。またプリブミの間ではイスラム式のいわゆる寺子屋教育が主流であったがここではコーランの読み方やその教えなどが中心であった。

[22] Abeyasekere, Susan., *Jakarta: A History*. pp.50-51.

[23] Francis, G., op.cit., p.1.

まじないや呪いなどの怪異がつきまとうプリブミ世界で、美しい女性ダシマが邪な企てに翻弄されたあげくに殺される。この『ニャイ・ダシマ物語』の世界は、プリブミ世界を巡って交わされるヨーロッパ人の間の噂話であり、彼らのプリブミイメージを具現化した作品なのである。

4.3 プリブミ世界とヨーロッパ人

そのプリブミ世界はヨーロッパ人と無関係に存在するわけではない。物語の中でWはダシマを媒体としてプリブミ世界と接するのだが、これは他の多くのバタヴィアに住むヨーロッパ人の宿命でもあった。そしてそれゆえ、Wがプリブミ世界にふれるこの瞬間、読者はWの視線を共有することになる。

そのWは、予想もしないプリブミの行為に翻弄され続ける。サミウンとの結婚を決意したダシマに別れを告げられた時、Wは「あまりに驚き、15分ほどは立ったまま言葉もなくダシマをみつめるだけ」[24]であった。そした凄惨な死体となって河を流れ下ってきたダシマの姿を目にした時には、彼は「おお、アラーよ！この死体がまことにダシマの死体と分かった時のWの悲しみはいかばかりであったか」[25]と悲嘆にくれる。

しかもWの許を去る時には生命と美貌と財産を備えていたダシマの、その余りの変わり様はどうであろう。財産をサミウンに騙し取られ、美貌は殺人者の短刀によって損なわれ、最後の生命さえも奪われている。ダシマが見せるプリブミ世界への境界線を越える前と後とのこの落差は、ヨーロッパ人世界とプリブミ世界との深い心理的断絶を示している。すぐ近くにあるだけに、理解不可能であるということの、その心理的な溝は深い。

4.4 イスラム — 解釈の基準

しかしバタヴィアに住む限り、ヨーロッパ人はそのプリブミと一つの社会で共存していかなければならない。その彼らにとっては、プリブミの行動の意味を解釈し、そこに一定の意味を読み取っていくことがどうしても必要になる。Wにとって、そしてWと視線を共有した読者にとって切実なのは、なぜダシマが行ってしまったかということである。「ああ、ダシマ、何故お前はそれほど私を嫌う？どこ

[24] ibid., p.23.
[25] ibid., p.37.

がいけないのか？　これまで長く共に仲良く暮らし、子供も授かったではないか。着る物が不満か、食べる物が不満か、それとも家計が不足か？」[26]。このWの問いに対する唯一の回答がイスラムなのである。『ニャイ・ダシマ物語』の中に一貫して流れるイスラムは、ヨーロッパ人が切実に求める、プリブミの行動を読み解く基準だったのである。

5　結び

『ニャイ・ダシマ物語』でプリブミ世界の全てを説明するイスラムは、結局のところ何も説明してはいない。イスラム教徒ならなぜそうするのか、という根源的な問いは不在のままで、イスラムにまつわる噂話だけが先行しているからである。しかし、ヨーロッパ人にとってはそれで十分だったのである。彼らが必要としていたのは、相手を理解する手段ではなく、同じ空間で共存する相手の行動を解釈する基準、あくまで自分が相手を「解釈」する基準だったのである。

[26] ibid., p.24.

表1．イスラム場面一覧表

場面番号はテキストでの出現順。ページ数はテキストでの出現ページを示す。

場面番号	場面展開
1	サミウン、イスラムにおける善行を行うとして、ブユンを仲間に誘う(p.5)。
2	ブユン、イスラムを理由にダシマに接近。イスラム教徒はイスラムの教えに無知であってはならないと説く(p.7)。
3	サミウン、まじないのためドゥクンを自宅に招待する。ハジとドゥクンの混同(p.9)。
4	ハジ、イスラムの名の下に、ブユンにサミウンへの協力を指示する。ハジとドゥクンの混同(p.10)。
5	ブユン、ダシマのイスラムを学ぶための教師としてサミウンの妻サレハを紹介する(p.12)。
6	ブユン、イスラム教徒の義務としてダシマに熱心にイスラムを学ぶことを勧め、今のままでは救われないと説く(pp. 12-13)。
7	ダシマの頼み事に対して、イスラム式に“Insja Allah”[27]と返答する(p.14)。
8	ブユン、屋敷のプリブミ使用人の口止めをイスラム教徒の名にかけて誓わせる(pp.14-15)。
9	ブユン、「私達の目的はアラーの神に同意された」という表現で口止めの成功を伝える(p.15)。
10	ハジがブユンにダシマに飲ませる秘薬を渡す(p.16)。
11	ダシマ、「アラーの神のお導き」で幸福である(p.18)と語る。
12	ブユン、ニャイである今の立場は姦通でありイスラムの罪であるとダシマに説く(pp.19-20)。
13	ブユン、ダシマに、共にイスラム教徒としての道を歩む相手としてサミウンとの結婚を進言する(p.22)。
14	ダシマ、イスラム教徒として生きたいとWに別離を告げる(p.23)。
15	ダシマ、Wに「私は異教徒になりたくはない」(p.24)と宣言する。
16	サミウン、イスラム教徒の習慣であるとしてダシマの財産を管理下に置く(p.27)。
17	サミウン、ダシマ殺害を思いつく。イスラムの教義に殺人の大罪から逃れる術がないかとハジと別のドゥクンに尋ねる。でたらめなイスラム教義(p.31)。
18	サミウンからダシマ殺害の企てを聞かされたサレハ、承諾の意思を伝える際に“Alhamdoelillah”と答える(p.34)。
19	場面展開の理由。「アラーの神は全てをお見通し」で、サミウンのダシマ殺害を目撃する者あり(p.35)。
20	同。河に捨てられたダシマの死体は「神の御意思で魚や鰐に食べられることなく河を流れ下った」(p.37)。
21	ダシマの死体を見つけたW、「おお、アラーよ！ 彼の悲しみはいかばかりであったか」(p.37)。

[27]神の思し召しがあれば。イスラム教徒の決まり文句。